



Vol.3 財務諸表編

岐阜聖徳学園大学
経済情報学部 経済情報学科 准教授

大成利広氏

●プロフィール

・広島県出身。広島修道大学大学院博士後期課程単位取得退学。東亜大学専任講師・准教授を経て、平成25年4月から現職。専門は経営分析、企業価値の評価。
・趣味は料理・テニス・キャラクターグッズ、フィギュアの収集。最終バーゲンセールに行っているときが楽しい時間。

お問い合わせ先

岐阜聖徳学園大学経済情報学部大成研究室
E-mail : onari@gifu.shotoku.ac.jp

企業の総合評価をみる

今回は収益性と企業の総合評価についてお話しします。

損益計算書を見ると、段階的に売上総利益、営業利益、経常利益、税引前当期純利益、当期純利益の「利益」が出てきます。企業にとっては最終利益である当期純利益が重要となりますが、他の利益を見ることで、企業の強みが分かります。例えば、営業利益の多い企業は本業の力が高い、経常利益が営業利益より多い場合は財務面が強いとなります。

利益と収益

損益計算書は上から読みますが、

視点を変えて、下から読むと費用を使うときに、どのくらいの売上高が必要なのか一つの基準として見ることもできます。

例えば、売上原価率が60%の企業の場合を考えてみます。この企業が交際費（一般管理費）に200万円使ったとき、この交際費を捻出するには、500万円の売上高が必要となります。

利益を出すためには500万円を売上げるよ

一般管理費(交際費200万円)

売上総利益(200万円) = 売上高 - 売上原価
売上総利益(200万円) = 売上高 - 売上高 × 売上原価率(60%)
売上高 = 500万円

り交際費を節約する方が容易であると分かります。

資本利益率の分解

投資の効率性を表す代表的な指標として、資本利益率があります。これは、投下資本に対してどの程度の利益があるかを示すものです。

資本利益率を分解すると売上高利益率×資本回転率によって表されます。投下資本の効率性である資本利益率を上げるには、売上高利益率を高めるか、資本回転率を早める必要があります。そのためには、利幅の高いものを売るか、不用な資本を整

理し、少ない資本で再投資する回数を増やす必要があります。

ウォール指数法

複数の財務比率を1つの指標に集約して、数値化することによって他社と比較する方法として「ウォール指数法」があります。指数法を使うと業界の平均や同業他社と比べて、自社の優劣を判断することができます。

この指数法は、財務比率から流動比率、負債比率、固定比率、商品回転率、受取勘定回転率、固定資産回転率、自己資本回転率の7つの財務比率を選び出し、各比率をウェイトづけします。ウェイトの合計は100%です。なお、各比率は値が高い方が良好になるように設定します。そして同業多数の企業からそれぞれの標準比率を計算し、企業の比率と標準比率から調整比率(企業の比率

標準比率)を計算し、各調整比率にウェイトを掛け合わせることで調整比率を計算します。調整比率が100%を超えていれば良好、下回っていれば不良ということになり

比率	ウェイト ①	標準比率 ②	A社の比率 ③	調整比率 ④=③/②	指数 ①×④
流動比率	25%	150%	180%	120%	30
負債比率	25%	50%	55%	110%	27.5
固定比率	15%	120%	150%	125%	18.75
商品回転率	10%	400%	580%	145%	14.5
受取勘定回転率	10%	500%	625%	125%	12.5
固定資産回転率	10%	250%	350%	140%	14
自己資本回転率	5%	200%	230%	115%	5.75
合計	100%				123

ます。そして7つの指数を合計して、企業を総合評価します。
表は、指数法を計算したものです。表よりA社は、調整比率がすべて100%を超えており、特に商品回転率145%と良好であることが強みとして表れています。負債比率は100%を超えています。A社全体の中では低めであるので、多少負債が負担となる可能性はあるかもしれませんが、総合評価として、総合指数が123で、標準比率の100%より高いので、信用力が高いと言いうことになります。
しかし、指数法は、指標の選択やウェイトのつけ方が科学的な根拠に基づいて決定されない点や信用分析に偏りが出ることが指摘されています。実際に指数法を使用する場合には、自社でカスタマイズして利用することが必要です。

産学官連携★シリーズ

岐阜市近郊の研究者を中心に連携できる内容を紹介します、企業との橋渡しを目指しています。

用語解説

売上高利益率：売上高に対する利幅の大きさを表す。
資本回転率：1年間に投下した資本が何回回収され再投資されたかを表す。

流動比率(流動資産/流動負債)：短期負債の支払能力をみる指標。高いほど支払能力が高い。

負債比率(総負債/自己資本)：返済義務のある負債が返済義務のない自己資本でカバーされているかをみる比率。低いほど財務安定性が高い。

固定比率(固定資産/自己資本)：資金化に長期間を要する固定資産が返済義務のない安定した資金で構成されているかをみる指標。低いほど財務安定性が高い。

商品回転率(売上高/商品)：1年間に商品が何回転するかを示すもので、商品が効率的に売上に繋がっているかをみる指標。回転率が低ければ、在庫を抱えていることになる。

受取勘定回転率(売上高/受取勘定)：受取手形や売掛金など売上債権の回収速度を表す。

固定資産回転率(売上高/固定資産)：固定資産が効率的に使用されているかをみる指標。

自己資本回転率(売上高/自己資本)：自己資本が何回回収され、再投資されているのか、自己資本の効率性をみる指標。

※負債比率と固定比率は、低い方が良好な指標であるので、ウォール指数法を使う場合、高い方がよくなるように分子と分母を逆にして計算する。

取材

岐阜市役所商工観光部 産業雇用課産業振興係
Tel.058-265-4141(代)

編集後記

今回で3回目となりました、大成先生の財務諸表編はこれで終了となります。自らが安定型経営企業か積極型経営企業であるか、診断したい方は、先生を訪ねてみてはいかがでしょうか。